

# 「アイス・ブレイカー」 ーワークショップのウォーミングアップー

多文化共生センター・岩山 仁



特定非営利活動法人である多文化共生センターは、阪神淡路大震災における被災外国人支援活動の経験をもとに、国籍や言語、文化や性などのちがいを認め、尊重しあう「多文化共生社会」を実現するため、さまざまなプロジェクトを展開している民間ボランティア団体です。

岩山仁さんは、多文化共生センターのボランティアスタッフとして、数多くの参加体験型学習を実施しています。

今回から、参加体験型学習で行われるワークショップの具体的なアクティビティーについてご紹介していきますが、その前に、ワークショップの進め方について簡単に説明しておきましょう。

ワークショップは、他の参加者と出会い、対話をし、共同作業をすることによって、自ら気づき、考えを深めて行くというプロセスを大切にする「学び」です。そして、そのプロセスを導いて行くのが「ファシリテーター」といわれる役割の人です。ファシリテーターは、学習者が参加しやすい雰囲気づくりをし、学習環境を整え、参加者自身からの「気づき」を引き出し、その「気づき」を参加者全員で共有しながら、課題を掘り下げ、整理をし、実践への橋渡しをしていく、といった重要な役割を担います。

さて、ワークショップは一般的に<表1>のような形で構成します。

まずは導入ですが、この“つかみ”はとても大切です。多くの場合、会場の隅の方から席が埋まり<笑>、席に座って講師の話だけ聴いて帰ろうという人がほとんどだったり、自分も参加して意見を言うということに緊張している人が多くいたりしますので、何よりもまず、そのような雰囲気をほぐ

<表1>ワークショップの構成

1	導入
2	本題
3	アクティビティー
4	気づきの共有
5	課題の掘り下げ
6	まとめ

し、自分も参加しようという気持ちになってもらわなくてはなりません。ですから、そのためにウォーミングアップを行う必要があるのですが、このウォーミング

アップを「アイス・ブレイカー」といいます。(日本では「アイスブレイキング」「アイスブレイク」と呼ばれることもあります。)

「アイス・ブレイカー」とは、氷を割るものという意味で、つまりここでは、緊張をほぐすという意味と、「面倒だから自分の意見なんか言わんとこう」と閉じてしまっている口や心を開いてもらうという意味があります。ですから、アイス・ブレイカーとして行うアクティビティーは、簡単にできて、参加者全員が何かしら口にする機会が必ずあり、お互いに知り合えたり、楽しめるような要素があるようなものが良いでしょう。

今回はこのアイス・ブレイカーとしてよく使われるアクティビティーを1つご紹介します。

## 他人紹介

- ①まず参加者でペアをつくります。
- ②人数が多い場合には、何組かのグループに分かれます。
- ③あらかじめ決められた項目(たとえば、名前、職業、自分の短所、研修のテーマに対するイメージなど)について、各々決められた時間内で話します。
- ④その後、互いに相手を他の参加者に紹介します。

大勢の前で自己紹介するのは緊張するという人は少なくないと思いますが、こうすることによって、緊張を和らげ、人前でしゃべるのが苦手な人と得意な人の差をなくすることができます。

また、研修のテーマに合わせて、話してもらう項目を考えて設定したり、逆に、項目を決めず、お互いに自由にインタビューする形式を取るなど、研修全体での意味合いを考えてバリエーションを加えると、より効果的になります。

国際人権ブックレットシリーズ最新刊 第9号

## 『東アジアの男女平等教育』

使ってみて!  
教材紹介

ヒューライツ大阪〔(財)アジア・太平洋人権情報センター〕では、出版事業の一つとして、シリーズでブックレットを制作し第9号まで発行しています。これは時々のホットな人権の課題について国際的な視点も交えながら、わかりやすく市民に伝えることを目的にした本です。最新刊のテーマは「東アジアの男女平等教育」で、これまであまり紹介されなかった韓国・台湾の新しい動きとともに日本のとりくみを紹介しています。

また、これまで、子どもの権利、アジアの学校の人権教育、地域社会の国際化など多様なテーマを扱ってきました。

「東アジアの男女平等教育」発行:ヒューライツ大阪

